

足跡マークで国立公園への外来植物の持ち込みを防ぐ（日本）

■ 背景 & 目的

生物多様性の減少を防ぐには人々の行動変容が不可欠だが、従来の規制や金銭的インセンティブにはコストや導入の面で困難が生じている。特に、国立公園等の自然保護区においては**外来植物等の侵入を防ぐために訪問者の靴の清掃を促すことが不可欠**だが、訪問者の知識や問題意識に頼るだけの管理では限界を迎えている。そこで、強制せず行動を促す「ナッジ」の応用が注目を集めている。本研究では、妙高戸隠連山国立公園を事例に、国立公園の登山口に靴の清掃ツールを設置し、**足跡マークや看板を用いた情報提供を組み合わせることで、行動変容を促す手法の有効性を評価した。**

● 研究方法

以下の4つの条件下で、国立公園訪問者の行動を観察

条件①足跡マークの設置 [ナッジ]

条件②外来植物の種子の持込事実に関する情報提示

条件③外来植物の種子の持込抑止方法に関する情報提示

条件④情報提示なし[比較対照区]

※（知識等に関するアンケート調査も別途実施）



調査地設定の概要

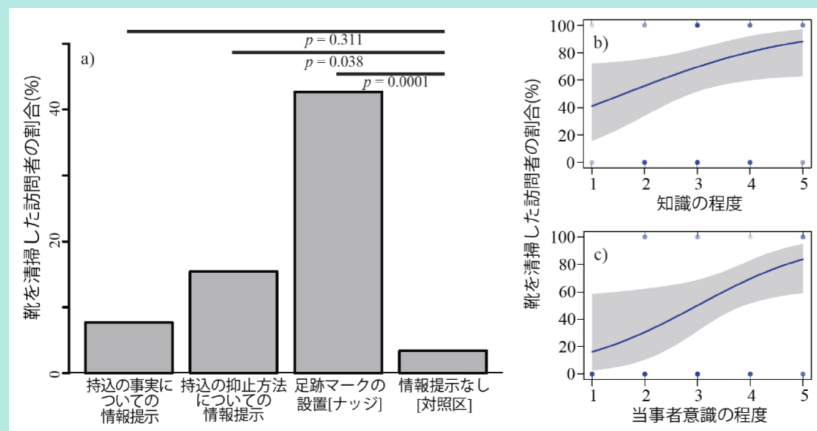
■ 結果

結果 1) 情報提示を行わない条件④と比較し、

**足跡マーク設置を設置する条件①は約21倍、
持込抑止方法を提示する条件③は約5倍の
訪問者が登山口で靴を清掃しやすくなる（右図a）**

結果 2) 足跡マークを設置する条件①では、

**外来植物の持込に対する知識
および当事者意識の程度が高いほど、
靴を清掃する割合が大幅に増加（右図b/c）**



結果の概要